広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	歴史と伝説 ： ソシュールの伝説・神話研究
Author(s)	金澤, 忠信
Citation	フランス文学 , 33 : 1 - 15
Issue Date	2021-06-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051031
Right	
Relation	

歴史と伝説
—— ソシュールの伝説・神話研究 ——

金澤　忠信

1. ソシュールの伝説・神話研究の位置づけ

スイスの言語学者フェルディナン・ド・ソシュール〔Ferdinand de SAUSSURE (1857-1913)〕は、『一般言語学講義』[1)]（以下『講義』）の著者として知られるが、これは彼が直接執筆したわけではなく、1907 年から 1911 年にかけて彼がジュネーヴ大学で行った同タイトルの 3 回の連続講義に出席した学生のノートをもとに、彼の死後、一冊の書物としてまとめられたものである。この書物によって、ソシュールは近代言語学の創始者と称されることがある。また、前世紀に記号論あるいは構造主義の先駆者とみなされ、その理論的基盤となったこともあり、1990年頃までは非常に多くの読者を獲得した。しかし、構造主義の衰退、フランソワ・ドッス言うところの「記号の領野＝白鳥の歌〔Le Champ du signe — Le Chant du cygne〕」[2)]以降は、「創始者」あるいは「先駆者」として取りあげられることは少なくなったように見える。ただし、おおいに読まれ、そして以前と同じ仕方では読まれなくなったのは、死後出版の『講義』である。生前の彼の著者は、21 歳のときに出版した『印欧語における原初的母音体系についての覚え書』と博士論文『サンスクリット語における絶対属格の用法について』[3)]の 2 冊のみで、いずれも 19 世紀の印欧歴史比較言語学に関するものである。

ソシュールは、印欧歴史比較言語学、一般言語学の他にも、アナグラム研究、伝説・神話研究を行っていたことが、1950 年代以降本格化したいわゆるソシュール文献学によって、ソシュール自身が書き残した手稿[4)]の調査から、明らかになった。さらに、1996 年にジュネーヴのソシュール家で発見された新資料には、ボーア戦争、アルメニア人虐殺事件、ドレフュス事件など、19 世紀末に起こった歴史的事件に関する手稿も含まれていた。

---

1) Ferdinand de SAUSSURE, *Cours de linguistique générale*, Paris, Payot, 1916.
2) François DOSSE, *Histoire du structuralisme I, II*, Paris, La Découverte, 1991-1992.
3) Ferdinand de SAUSSURE, *Mémoire sur le système primitif des voyelles dans les langues indo-européennes*, Teubner, Leipzig, 1879 [1878] ; *De l'emploi du génitif absolu en sanscrit*, Genève, J.-G. Fick, 1881.
4) ソシュールの手稿を参照する際に用いられる« Archives de Saussure » はソシュール家からジュネーヴ図書館〔Bibliothèque de Genève〕に寄託された資料を表す。« Ms. fr. » は「ジュネーヴ図書館蔵、フランス語手稿（目録番号）」を表す。« f. » はばらばらになっている紙片（に付された番号）を表す。また、以下、引用文（訳文）において、＜　＞はソシュールによる加筆・修正、［　］は手稿のなかで空白部分あるいは金澤による注釈、傍点は下線を表す。

筆者はこれまで、ジャン・スタロバンスキー〔Jean STAROBINSKI (1920-2019)〕の『ソシュールのアナグラム――語の下に潜む語』[5]およびソシュールの伝説・神話研究の一部[6]を翻訳し、著書として『ソシュールの政治的言説』[7]を出版した。「一般言語学講義のソシュール」を「真のソシュール」とする立場からは、きわめて限定的で偏った読み方と映るかもしれないが、そもそもこのような読み方ができるようになったのは、広く『講義』が読まれ、そして「先駆者」としては読まれなくなったからこそであるとも言える。こんにち、21 世紀において、20 世紀の知の枠組みから遡るかたちでソシュールに「先駆者」を見るのではなく、むしろソシュールの思考の軌跡をたどり直すかたちで、19 世紀の学問的状況のなかにソシュールを置き直してみる必要があるのではないだろうか。特に本論で取りあげる「伝説・神話研究のソシュール」については、19 世紀の文献学や歴史学との関わりを踏まえたうえで、20 世紀の終わりから 21 世紀にかけての現代の歴史学と対比してみると、その特異性および現代性（アクチュアリテ）が浮き彫りになる。

2. 伝説・神話研究の方法論および目的

伝説・神話研究を行うにあたり、ソシュールはまず、ゲルマン英雄伝説、トリスタン伝説、ギリシア神話（特にテーセウス）の作品群およびそれぞれの異本を比較対照し、多少とも一致・類似しているものを網羅的に調査している。そして、人名・地名、登場人物の行為とその動機、登場人物どうしの関係、出来事が起こる場面の地理的位置関係などの項目を一覧表にまとめている。そこに多くの「一致」が見られるとき、すなわちいくつかの物語に共通する定番のアイテムや「お約束のやり方」、総じて「ありきたりなもの〔banalité〕」が認められるとき、それは原初の物語においてすでにあったものであり、それが連綿と語り継がれてきたと考えられる。

> 不幸にも＜あるいは不運にも＞、テーセウスの物語は、ある別のありきたりな冒頭と本質的に区別できないような題材から始まっている。その題材というのは、多少とも正規の生まれの青年が、正体不明の状態で王の宮廷にやって来て、はたしてそこで功績を挙げる、というもの

---

[5] Jean STAROBINSKI, *Les mots sous les mots ―Les anagrammes de Ferdinand de Saussure*, Paris, Gallimard, 1971.〔ジャン・スタロバンスキー、『ソシュールのアナグラム――語の下に潜む語』、金澤忠信訳、水声社、2006 年。〕

[6] Ferdinand de SAUSSURE, « Légendes et récits d'Europe du Nord : de Sigfrid à Tristan », *Cahier Saussure*, Paris, L'Herne, 2003.〔フェルディナン・ド・ソシュール、「北欧の伝説と説話――ジークフリートからトリスタンまで」、『伝説・神話研究』、金澤忠信訳、月曜社、2017 年。〕

[7] 金澤忠信、『ソシュールの政治的言説』、月曜社、2017 年。

である。この冒頭は、同一作品群のなかで、英雄としての経歴が始まる、いわばお約束のやり方であって、それゆえ、我々が支持する一般的比較に適ったかたちではいささかの推定の余地もないかもしれない。ここでは逆に、テーセウスの冒頭は非常に独創的なやり方から離脱するのが不可能という、反対方向の暗礁に警戒しなければならない。そこからの帰結として、テーセウスの冒頭とトリスタンの冒頭の同一性を疑うような推定が出てくるだろうか。けっしてそんなことはない。ただし、この部分について基準となりうるようなものはない[8]。

ソシュールは、テーセウスの物語とトリスタンの物語を比較し、両者の冒頭部分で展開される英雄の経歴の「同一性」を示しているわけだが、もちろん単純に前者が後者の下敷になっている、ということを言いたいわけではない。ここで問題になっているのは、冒頭の部分が非常に「ありきたりなもの」である、つまり古くから、いくつかの作品群のなかで、何度も繰り返し現れてきた「常套句」であるということだ。ソシュールは、この「常套句」としてのエピソードの古さを検証しようとするのだが、その検証の仕方は非常に独特で、ソシュールの伝説・神話研究の特異性はまさにここにあると言ってよい。ソシュールが古さの検証にあたって特に注目するのは、物語の大筋や中心的な話題などではなく、むしろそれとはあまり関係のない行為や、物語の展開にとってあってもなくてもいいような出来事のほうである。

深遠で、劇的で、道徳的な意味をもっているとされる物語（イストワール）が、『トリスタン』のように、中心的な話題にとって意味も時宜も認められない単調かつ無用な出来事を、はじめの諸章で延々と繰り広げるのを見るとき、その中心的な話題のほうが付け足しであり、ときに見事だがつねに事後的な創作であって、物語（イストワール）全体の真の実体を含んでいるのはむしろはじめの冗長な数章であると考えられる。それらの章が別のかたちになることなど、どうしてあるだろうか。（後続部とかみ合わないようなどんな叙事詩の導入部でも取ってくるのは可能であるが、詩的には不条理であるという事実に鑑みて、確実にそれこそが古い基盤なのである）。トリスタンとその宿命的な愛を描くために、彼が生まれ、海賊たちと冒険をし、彼が［　］、彼の養父が彼を探すのに三年費やし、彼がモルガンにたいして父の復讐をすることが、いったい何の役に立つのか。これらはどうにも無用で、たいして面白くない事柄であるがゆえに、まずトリスタンについて語られる真実であるという特徴を必然的に呈している。なぜなら、説話を潤色したり調整したりするためにそれらの事柄を創作したとされるような詩人には同情しなければならないだろうから。とにかく、詩人はそれらの事柄を受け取り、それらをあえて伏せておこうとはしなかった。彼の気に入った点にたいして仇（あだ）となってしまっても、また逆に、ある特定の場

[8] Ms. fr. 3959/3, p. 6; *Cahier Saussure*, p. 401.〔『伝説・神話研究』、82-83 頁。〕

所で、ある特定の話題のために、彼が伝説に手を加えているところでも、やはり伏せておこうとはしなかったのである[9]。

常識的な解釈からすれば、「深遠で、劇的で、道徳的な意味をもっているとされる物語（イストワール）」における「中心的な話題」と「単調かつ無用な出来事」とでは、後者のほうが「付け足し」で、「事後的な創作」とみなされるだろうが、ソシュールは、「単調かつ無用な出来事」が時代を経てもなお残存していることをいわば逆手にとり、「中心的な話題」と「単調かつ無用な出来事」の優先性あるいは先行性を逆転させる。その手続きが正当性をもつ根拠とは、詩人は「説話を潤色したり調整したりするために」、「無用で、たいして面白くない事柄」を、あとからわざわざ物語（イストワール）に付け加えるはずはないからである。たとえ「後続部とかみ合わない」としても、詩人は「単調かつ無用な出来事」を「あえて伏せておこうとはしなかった」のであり、受け継ぐべき物語（イストワール）のなかにそのまま残したのである。してみると、「単調かつ無用な出来事」のほうが物語（イストワール）の「古い基盤」であり、「物語（イストワール）全体の真の実体」ということになる。

このときソシュールは、詩人（伝説作者）や語部（かたりべ）は先行する時代から伝えられた物語（イストワール）をそのまま語り継ごうとするものだ、という前提に立っている。

——そのときどきに、先人たちの記憶の欠如によって、あるいは別の仕方で、伝説をまとめる詩人は、しかじかの場面にたいして、もっぱら演劇に固有な意味での小道具しか取り集めない。役者が舞台を去ったあとにあれこれの小物が残っている。床の上の花や［　］それは記憶のなかにとどまり、多少とも何が起こったかを語る。しかし部分的でしかなく、［　］に余白を残しておく——

——作者あるいは語部（かたりべ）には、彼よりも前の時代に語られていたことをできるかぎり踏襲しようとする意図があることを、特殊な場合を除いて、ゆめゆめ疎かにしてはならない。この点に関しては、根深い保守的傾向が伝説の世界全体をくまなく支配している。

しかし記憶欠落の上での想像力は、かえって伝統にとどまろうとする意志を伴った変化の主たる要因である[10]。

「伝説の世界全体をくまなく支配している」という「根深い保守的傾向」のために、テーセウスからトリスタンにいたるまで、幾多の伝説において、同じような話

---

9) Ms. fr. 3959/10, p. 17; *Cahier Saussure*, p. 421.〔『伝説・神話研究』、114-115 頁。〕
10) Ms. fr. 3959/3, p. 3; *Cahier Saussure*, p. 400.〔『伝説・神話研究』、81 頁。〕

題が繰り返し語られ、「ありきたりなもの」とみなされるようになるのだが、ここでは伝説の変化の要因についても言及されている。伝説の変化には、何か法則のようなものがあるわけではない。伝説が変化する「主たる要因」は「記憶欠落」である。部分的に記憶が欠如したまま、しかし「前の時代に語られていた」伝説をそっくりそのまま受け継ぐために、「伝説をまとめる詩人」は「想像力」によって欠落部分を補完しようとする。「変化」とは、その際不意に生じるノイズのようなものと言えばよいだろうか。当代の詩人は「小道具」を遺漏なく取り集め、前の時代に上演されていた舞台を完全に再現しているのか、それとも記憶が欠落している部分を想像力によって補っているのか、いずれにしても、それは後継者たちの記憶のなかにとどまる。そして、たとえば「床の上の花」が若き王子の暗殺を、形見の「剣」が王位継承を、「指輪」が敵対する者どうしの口論を、語る。しかし、それは初めから二人の女性の間の口論だったのか、そもそも口論のきっかけは本当に「指輪」だったのか、それとも別の装飾品、たとえば「帯」ではなかったのかどうかについて検証する必要がある。

そうした「小道具」、「小物」などの「細部」の検証作業は、「古い基盤」をなしていると想定される「ありきたりな部分」においてなされる。

> 細部を検討すべきなのは、特にあまりにもありきたりな部分においてこそであるという原則から我々は出発する。これは、あるありきたりな型へ収斂する伝説的説話の傾向は異論の余地のないものであり、他方で、いくつかの出発点の相違は確実であるということを踏まえている。もし仮にそのようなやり方をしないとなると、たとえば、あらゆる戦い ＜伝説が我々に語りうる戦い＞は、同じ一つの戦いとして＜わざわざ検討するに値しないとも＞考えられるようになってしまうだろう。――というのもそれは、＜なんらかの戦いが行われるのは不可避であり、至極ありきたりである以上、それだけを扱う必要はまったくない＞ありきたりなテーマなのだから。＜しかしながら、我々が確証するのは［　］＞――しかしながら、いわば、伝説のなかで、既知の戦いそれぞれに対してきわめて特定的な形があるのであって、中途半端な研究者でもなければ曖昧なところはない。生誕の出来事（アヴァンチュール）は殺陣（たて）とは別の出来事に類するものであり、殺陣はまたさらに別の出来事に類するものである。そんなことも知らずに、どうしてそれらを扱う資格があると思うのか[11]。

ここでソシュールが言っているのは、諸伝説を比較対照した結果、「細部」の「一致」が多く見られるとき、そこに「ありきたりな型へ収斂する伝説的説話の傾向」を確認することはできるが、それと同時に、たとえ「あまりにもありきたりな

---

[11] Ms. fr. 3959/3, p. 7; *Cahier Saussure*, pp. 401-402.〔『伝説・神話研究』、83-84 頁。〕

部分」であっても、それぞれの「出来事（アヴァンチュール）」には個別の「出発点」があるのであって、この「出発点の相違」を明らかにするために、あらためて「細部」を検討しなければならない、ということだ。

英雄伝説にありがちな生誕の秘話、戦での武勇伝、壮絶な死の「出来事（アヴァンチュール）」には、特定の「出発点」がある。かくしてソシュールは、「古い基盤」の一つにもともとあったはずの「細部」を、まずは現存する異本から探り出そうとする。

3. 起源の非英雄伝説

テーセウス、トリスタン、ジークフリート（『ニーベルンゲンの歌』）の伝説は、英雄の生い立ちと殺害による非業の死、登場人物たちの相関関係、「伝説の地理学」（移動経路・滞在地）などの類似点によって同一作品群のなかに収められるのだが、それぞれに異なる点もあり、なんらかの個別性・特異性が認められる。ソシュールは、「ジークフリートの死」について、いくつかの異本を突き合わせながら、より「古い基盤」を見極めようとするのだが、その際に基準となるのは、「詩趣喪失〔*dépoétisation*〕」あるいは「装飾欠如〔dépouillement〕」[12]と呼ばれるものである。

たとえば、一つの異本では、英雄は狩りの最中に殺される。別の異本では、狩りから戻ったあと、自室のベッドで睡眠中に殺される。二つの異本のうち、より古いのは後者のほうである。なぜなら、狩りの最中に比べると、室内で睡眠中に暗殺されるのは、英雄にはふさわしくない死に方であり、後代に「伝説をまとめる詩人」が、偉大な叙事詩に見合わない舞台をわざわざ追加ないし修正するかたちで設定するはずがないからである。だからそれはもともと「古い基盤」にあった、ということになる。

一つ目の異本に至る前段階として、暗殺の共謀が成立したのは、ジークフリートが狩りに出ている間だった、という筋書きは想定可能である。もしそうだとすると、「狩り」と「共謀」という二つの同時的・付随的な状況が、「記憶欠落の上での想像力」によって、英雄の暗殺という一つの本質的な場面へと昇華した、ということになる。

狩りの最中での英雄暗殺の場面には、考慮に入れるべきもう一つの「細部」がある。『ニーベルンゲンの歌』のほぼすべての異本で、ジークフリートは清らかな泉の水で喉を潤しているとき、あるいはそのあとに、虚を突かれて死ぬ。清らかな泉での英雄の死は「詩的な光輪（ニンブズ）」に包まれる。だが、泉に至る前の場面で、英雄は、喉の渇きに堪えられないにもかかわらず、わざわざ遠回りをしたり、競争したりし

---

[12] Ms. fr. 3958/4, p. 10; *Cahier Saussure*, p. 370.〔『伝説・神話研究』、35 頁。〕

て、明らかに物語の筋が不自然になっている。喉の渇きのそもそもの原因は、狩人たちの食事の席にワインを運ぶ酌人（しゃくにん）が現れなかったからで、英雄はワインの代わりに水を飲もうとしたのである。しかし、ある別の異本では、ジークフリートは水ではなく、ワインを飲む。これも「詩趣喪失」の原理に照らし合わせて推測すると、より「古い基盤」において英雄はワインを飲んで酔っ払い、自室のベッドで眠っている間に暗殺者の手にかかった、ということになる[13]。

このような仕方で、ソシュールはまず、現存している異本のうち、成立年代のより古い異本を確定しようとし、次に、異本のなかに現れている説話の形態から、異本には現れていない説話の原初形態を類推する。そしてさらに一歩踏み込んで、伝説と歴史の関係についても言及している。

> 通説となっている批評の考え方では、すべてはウォルムス王国にもとづいているとされている。この考え方は、それにじゅうぶん気をつけ＜ようとす＞るならばの話だが、テクストに忠実な姿勢を崩さないことを口実に、我々の倍ほども大胆な歴史的結論へと行き着く。そのとき我々は、『ニーベルンゲンの歌』のなかに、歴史にたいするとんでもない宝庫をもつことにはなるまいか。435 年のブルグント小王国は、年代記に二度言及されていることでかろうじてその存在が確認されるのだが、その生きた姿がそっくりそのまま我々の眼下にあり、しかも他に類を見ないほど豊かな細部を湛えているというのだ！　歴史（イストワール）にぽっかりあいた穴は、汲めども尽きぬ泉に置き換えられる。ここである疑念が生じる。少なくとも次のように問いたくなる。この豊饒な伝説は、すべてが純粋な空想の産物なのか。どうやらそうでもないらしい。では、伝説が歴史的な下地のうえで伝わるものであるとすると、伝説自体が提示するものと同時並行して年代記作者たちによって絶対に知られていて収集される歴史的な下地のうえで伝説は伝わるということに分があるのか。このように、我々が説話の下地は作り物などではなかったと認めるや、歴史（イストワール）にたいして恒久的にひとつの具体物を提示する唯一のブルグント王国、すなわちリヨン王国に視線が向けられる[14]。

ソシュールは、伝説は「空想の産物」ではなく、「歴史的な下地のうえで伝わるもの」とする仮説を提起し、『ニーベルンゲンの歌』における「ジークフリートの死」に対応する「歴史的な下地」として、522 年にリヨンで起こったブルグント王国の王子ジゲリック〔Sigéric (?-522)〕の暗殺に焦点を当てる[15]。ただし、『ニーベルンゲンの歌』で直接名指されているウォルムス王国の時代からは約 1 世紀ずれて

---

13) Ms. fr. 3958/4, p. 11; *Cahier Saussure*, pp. 370-371.〔『伝説・神話研究』、35-36 頁。〕
14) Ms. fr. 3958/2, p. 4; *Cahier Saussure*, pp. 362-363.〔『伝説・神話研究』、23 頁。〕
15) Ms. fr. 3958/4, pp. 49v-50; *Cahier Saussure*, pp. 372-373.〔『伝説・神話研究』、38-39 頁。〕

おり、地理的にも、一応ブルグンディア地方ではあるが、中心都市が異なっている（ウォルムス／リヨン）。また、歴史上の人物であるジゲリックの父ジギスムント〔Sigismond (?-523)〕がブルグント王国（リヨン王国）の王であるのに対し、伝説上の人物ジークフリートの父ジークムントはネーデルラント王国の王であり、ブルグント王の地位はグンテルが占めている。このように、時代、地理、人物の特徴・役割にいくらかの「転位」は認められるものの、522 年のジゲリック暗殺という「歴史的事実」に関して、ソシュールは、トゥールのグレゴリウス〔Grégoire de Tours (538-594)〕の『フランク史』や、ほぼ同時代のアヴァンシュのマリウス〔Marius d'Avanches〕の年代記などを参照しながら、「『ニーベルンゲンの歌』のなかに、歴史にたいするとんでもない宝庫をもつことにはなるまいか」という「大胆な歴史的結論」を導く。そうして「歴史（イストワール）にぽっかりあいた穴」を埋めようとしている。

しかしながら、ソシュールは「伝説と歴史のあいだに完全な一致を想定」しているわけではない。たとえ特定の出来事が「歴史的な下地」となって伝説を生み出したという確実な証拠があったとしても、出来事としての歴史（イストワール）から物語（イストワール）としての伝説への移行については「厳密な論証が不可能」であり、「ある程度の近似値」しか期待できない[16]。また、「1904 年暮れ」という日付のあるノートでは、「歴史（イストワール）と伝説」を「真実と虚構」として区別し対立させることは、「歴史的批判にとっては適切」だが、「詩的伝説の起源の研究にとっては、結局意味がない」と述べている[17]。これはなぜなら、詩的伝説は、そもそも事実そのもの（「虚構」に対立するものとしての「真実」）を根拠にして生み出されるわけではないからである。ソシュールは、伝説が「歴史的」であるということを、「諸事実についての同時代の（通俗的な）解釈から汲み取られている」あるいは「事実およびその通俗的・事後的な反響とは無関係の源泉から汲み取られていない」と定義する。つまり、伝説研究者にとって「歴史（イストワール）」とは、「事実」が起こった時代、あるいは後の時代に、伝説の基盤となった年代記の作者が「事実」についてなした「解釈」にほかならない。また、その「事実」についての「解釈」は、必ずしも年代記作者ひとりのものではなく、多少とも広く流布していた「解釈」あるいはその「反響」の場合もある。それゆえソシュールは、トゥールのグレゴリウスがカトリックの司教であり、アタナシウス派だったブルグント族にあってカトリックに改宗したジギスムント王およびその息子のジゲリック王子について、「事実」が起こったリヨンから離れたところで、数十年後に書いていることを踏まえたうえで、しかし意図的に虚偽

---

16) Ms. fr. 3958/1, p. 1; *Cahier Saussure*, p. 360.〔『伝説・神話研究』、19 頁。〕
17) Ms. fr. 3959/4, p. 8; *Cahier Saussure*, p. 364.〔『伝説・神話研究』、27 頁。〕

の報告をしているとみなすことなく、『フランク史』を批判的に読むのである[18]。現代の歴史学の問題につなげるために、やや強引に言い換えれば、年代記や伝説を、歴史（イストワール）でも物語（イストワール）でもあるようなテクストとして、読むのである。

4. 歴史と文学――伝説・神話研究の現代性

イヴァン・ジャブロンカ〔Ivan JABLONKA (1973-)〕は『歴史は現代文学である』[19]の序説を「歴史（イストワール）でも文学（リテラチュール）でもあるようなテクストを想像できるだろうか」という問いで始めている。そもそもこのような問いが提起されるのは、歴史（イストワール）は文学（リテラチュール）ではないということが自明とされている現状があるからである。しかし、ジャブロンカの指摘するように、もともと歴史は文学と親密な関係にあった。つまり歴史（イストワール）と物語（イストワール）の区別はそれほど厳密ではなかった。それが 19 世紀になって、歴史は文学から分離独立するかたちで、科学として成立した。

ソシュールが伝説・神話研究を行っていたのは、手稿に稀に記されている日付を手がかりにするかぎりでは、1903 年 7 月から 1910 年 10 月頃までである[20]。これは歴史が「実証科学」の一つに加えられるようになった 1870 年代以降の時期、そして 1929 年にマルク・ブロック〔Marc BLOCH (1886-1944)〕とリュシアン・フェーヴル〔Lucien FEBVRE (1878-1956)〕が『経済社会史年報』〔*Annales d'histoire*、*économique et sociale*〕（『アナール』）を創刊し、歴史学が、いったんは訣別した文学と縒りを戻し、さらに経済学、社会学、人類学など、人文・社会科学の諸領域へと開かれていく以前の時期と捉えておけばよいだろうか。

ジャブロンカは、「厳密に科学的な視点」[21]での歴史研究の先陣を切った「方法的歴史家」の一人として、ガブリエル・モノ〔Gabriel MONOD (1844-1912)〕の名をあげている。ソシュールもブルグンディアの歴史に関する参考文献としてモノの『メロヴィング朝の歴史の原資料に関する批判的研究』[22]を示唆しており、特にトゥールのグレゴリウスとアヴァンシュのマリウスについてはこの著作に多くを負っ

---

18) Cf. 金澤忠信、「ソシュールの伝説・神話研究における歴史の概念」、『香川大学経済論叢』第 92 巻第 3 号、2019 年 12 月、13-20 頁。

19) Ivan JABLONKA, *L'histoire est une littérature contemporaine. Manifeste pour les sciences sociales*, Paris, Seuil, 2014.〔『歴史は現代文学である――社会科学のためのマニフェスト』、真野倫平訳、名古屋大学出版会、2018 年。〕なお本論では Éditions du Seuil, « Points Histoire », Format Kindle, 2017 を参照した。

20) これは「一般言語学講義」の時期（1907-1911 年）とも、アナグラム研究の時期（1906-1909 年）とも重なっている。

21) Gabriel MONOD, « Du progrès des études historiques en France depuis le XVIe siècle », *Revue historique*, tome I, janvier-juin 1876, p. 36.

22) Gabriel MONOD, *Études critiques sur les sources de l'histoire mérovingienne*, 2 vol., Paris, A. Franck, 1872-1885.

ているはずである[23]。だが、伝説や年代記を読解する方法論に関して、明示的に参照しているのは、アメデ・ティエリ〔Amédée THIERRY (1797-1873)〕の『アッティラとその後継者たちの歴史 —— ハンガリー人のヨーロッパへの定着まで』[24]である。

この著作において、ティエリは、アッティラを「歴史的人物」ではなく「伝説的人物」（「神の懲罰」、キリスト教の「開祖」）としてとらえてきた従来の「幻影」を排して「人間アッティラ」に迫り、「現実」の描写を試みる。ただし、人間精神は理由なしに「猛烈な空想」に耽るわけでなく、「幻影」や「誤謬」の根底には、それぞれの時代の人間精神の「真実」がある。それゆえ、アッティラ像の変容・多様化の理由をひもとき、「幻影」「誤謬」をひとつずつ剥がしていけば、「歴史的人物」としてのアッティラが垣間見えてくるはずである。そのために、アッティラにまつわるさまざまな伝説・伝承は、「人間アッティラ」の歴史的研究に必要な補足資料として用いられる。このようにしてティエリは、アッティラにまつわる諸伝承・伝説に、歴史から忘れ去られた人物や「出来事についての細部」、異教徒としてのフン族の「宗教的特徴」などに関する証拠資料としての価値を見出している[25]。

ソシュールは、ティエリにならって、ドイツ英雄伝説やキリスト教的な伝説に「お人好しで情に厚いアッティラ像」が見られるのは、アッティラが（堕落したローマ人＝キリスト教徒に対して遣わされた）「神の懲罰」から（異教徒であったフン族がキリスト教に改宗して以降）反転して「徳の高い王」になったからだと考える[26]。いずれにしても、そこに「5 世紀のゲルマン人たちの記憶」はない。かくして、南ドイツの叙事詩では、「良きアッティラ」が語り継がれるようになった一方で、北欧の英雄叙事詩においてアッティラは「陰湿な拷問人」として登場する。ソシュールは「ノルドの原典」のほうを歴史的研究のために準拠すべき資料とみなし、「歴史的人物」としてのアッティラは「陰湿な拷問人」に近いか、あるいは『シーズレクのサガ』が語るように「特徴が平凡」であったと推測する[27]。

ところで、アメデ・ティエリの兄オーギュスタン・ティエリ〔Augustin THIERRY (1795-1856)〕[28]は、ジャブロンカによれば、トマス・カーライル〔Thomas

---

[23] Ms. fr. 3959/4, p. 33; *Cahier Saussure*, p. 367.〔『伝説・神話研究』、30 頁。〕« fin 1904 » と日付が記載された頁が含まれるノート。
[24] Amédée THIERRY, *Histoire d'Attila et de ses successeurs, jusqu'à l'établissement des Hongrois en Europe*, 2 vol., Paris, Didier, 1856.
[25] Cf.「ソシュールの伝説・神話研究における歴史の概念」、8-11 頁。
[26] Archives de Saussure 382/5, f. 35.
[27] *Ibid*.
[28] Cf. Augustin THIERRY, *Récits des Temps Mérovingiens*, Paris, Libraire Garnier Frères, 1840.〔オーギュスタン・ティエリ、『メロヴィング王朝史話』（上・下）、小島輝正訳、岩波文庫、1992 年。〕ソシュールもこの著作を参照しているはずだが、筆者が確認したかぎり、手稿において言及は見られない。

CARLYLE (1795-1881)〕、ジュール・ミシュレ〔Jules MICHELET (1798-1874)〕とならんで「自由主義的でロマン主義的な歴史家」である。弟も、19 世紀前半のロマン主義の薫陶を受け、近代的な学問としての歴史学の一環で、国民と国家の起源を問う歴史書を著している。そこには兄と同じ「歴史への情熱」が垣間見えるが、ソシュールはむしろそこから、「情動を飼い慣らし」、原資料を徹底的に調査する研究者の「正確さへの執念」を汲み取っているように見える[29]。

このことに関連して、「真理についての記述」と題された節の末尾でジャブロンカは「歴史とは、誤謬や虚偽や忘却や沈黙との戦いであるが、それはまた自分自身との戦いである」と述べているが、ソシュールも同じ歴史の戦いに、まったく異なる仕方で取り組む。

> 私たちの上方に広がる時間の限りなさは、ひとがそれについて何と言おうと、~~私たちの精神~~<~~想像~~>をあまり刺激しない。人間本性は、未来と折り合いをつけ、<~~まさに必要に~~必要なときに>現在の色で~~未来~~<それ>を色づける方法を見つけ出すのが常である。~~しかし~~過去の深淵というものは、~~おそらく感覚を与える　おそらくもともと与える　裂け目の~~<計り知れないものの>感覚を与える。なぜなら、~~私たちの何も　投影されえない　自己投影する~~　幾世紀の遡及に、私たちの何も自己投影することができないからであり、また、あの限りなさは、私たちなしで、~~絶対的に~~<必然的に>想像そのもののためにあるという特徴をもっているからである[30]。

「過去の深淵」は「計り知れないもの」であり、「私たち」の想像を過去に投影することはできない。端的に言って、過去に「私たち」はない。「過去の深淵」に対しては「私たちなし〔*sans nous*〕」の想像そのものが向き合わなければならない。そのようにして、ソシュールは、過去に対する主観的な想像を排し、過去における客観的な事実を探求・検証しようとする。この点でソシュールは「本当に起こったまま〔wie es eigentlich gewesen ist〕」を客観的に解明しようとするレオポルト・フォン・ランケ〔Leopold von RANKE (1795-1886)〕の立場に近いように見える。

しかし、ソシュールが研究対象とするのは伝説と、伝説の起源である。伝説は真実（「本当に起こったまま」）ではないが、虚構でもない。ある意味真実でもあり虚構でもある。伝説の起源の研究者は、「歴史（イストワール）と伝説」を「真実と虚構」として対立させることを無効にしている。伝説の作者や語部（かたりべ）は前の時代に語られてい

---

29) « L'énoncé de vérité » in *L'histoire est une littérature contemporaine.*〔「真理についての記述」、『歴史は現代文学である』、149-152 頁。〕
30) Archives de Saussure 382/5, f. 52. Cf.「ソシュールの伝説・神話研究における歴史の概念」、7-8 頁。

たことをできるかぎりそのまま踏襲しようとするものであって、なんらかの意図（主観・自我）をもって創作したり脚色したりすることはない。ミシェル・ド・セルトー〔Michel de CERTEAU (1925-1986)〕の文言をもじって言えば、「真の詩人ならば誰しも細部についての歴史家でありつづける」[31]。それゆえ、伝説の起源を遡るには、「細部」を徹底的に調査し、「細部」の意図せざる「変化」とその客観的原因を探求することが必要となる。

こうしたソシュールの方法論は、ジャブロンカの『私にはいなかった祖父母の歴史』[32]、アラン・コルバン〔Alain CORBIN (1936-)〕の『記録を残さなかった男の歴史』[33]、『知識欲の誕生』[34]などの歴史研究と比較してみるとき、その特異性が際立つと思われる。現代の歴史家は、語りえぬもの、忘却されたもの、記録がないものを語る必要性から、当事者の主観性を再構築し、いわゆる客観的事実と交錯させることによって、新たな歴史記述を試みる。言い換えれば、歴史記述において物語性（ナラティヴィテ）の正当性を担保しつつ、科学としての歴史に「方法としてのフィクション」を導入することで、新たな認識の次元を開こうとしている。

ソシュールの場合、ちょうどその反転であると言えば分かりやすいだろうか。ソシュールは、伝説の起源の研究において、歴史的事実を目の当たりにした者、それを語る者、それを語り継ぐ者の主観性を排し、「詩趣喪失」の原理にもとづいて「細部」の検証作業を行うことによって、物語（イストワール）としての伝説に方法としての歴史（イストワール）を導入する。言うなれば、ソシュールの伝説・神話研究は、現代の歴史学の反対側から出発してそれとすれ違っている。その意味で、現代の歴史学の問題、歴史認識の問題、歴史と文学の関係を考えるにあって、ソシュールの伝説・神話研究は一つの対極的な参照軸になるはずである。20 世紀の記号論の延長線上でソシュールを読むのではなく、21 世紀にソシュールの伝説・神話研究を読む現代性（アクチュアリテ）は、そのようなところにあるのではないだろうか。

---

31) Michel de CERTEAU, *L'Écriture de l'histoire*, Paris, Gallimard « Folio histoire », 1975, p. 111.〔ミシェル・ド・セルトー、『歴史のエクリチュール』、佐藤和生訳、法政大学出版局、1996 年、101 頁。〕

32) Ivan JABLONKA, *Histoire des grands-parents que je n'ai pas eus*, Paris, Seuil, 2012.〔イヴァン・ジャブロンカ、『私にはいなかった祖父母の歴史』、田所光男訳、名古屋大学出版会、2017 年。〕本論では Éditions du Seuil、 Format Kindle、 2012 を参照した。

33) Alain CORBIN, *Le monde retrouvé de Louis-François Pinagot*, Paris, Flammarion, 1998.〔アラン・コルバン、『記録を残さなかった男の歴史』、渡辺響子訳、藤原書店、1999 年。〕

34) Alain CORBIN, *Les Conférences de Morterolles, hiver 1895-1896. À l'écoute d'un monde disparu*, Paris, Flammarion, 2011.〔アラン・コルバン、『知識欲の誕生』、築山和也訳、藤原書店、2011 年。〕

付記　本論は、2018-2020 年度科学研究費補助金（基盤研究(C)「ソシュールの伝説・ 神話に関する手稿の文献学的研究」、課題番号 18K00480、研究代表者・金澤忠信） による研究成果の一部である。

――参考文献――

CERTEAU, Michel de (1975), *L'écriture de l'histoire*, Paris, Gallimard.〔ミシェル・ド・セルトー、『歴史のエクリチュール』、佐藤和生訳、法政大学出版局、1996 年。〕

CORBIN, Alain (1998), *Le monde retrouvé de Louis-François Pinagot*, Paris, Flammarion (« Champs », 2016).〔アラン・コルバン、『記録を残さなかった男の歴史』、渡辺響子訳、藤原書店、1999 年。〕

— (2011), *Les Conférences de Morterolles, hiver 1895-1896. À l'écoute d'un monde disparu*, Paris, Flammarion.〔『知識欲の誕生』、築山和也訳、藤原書店、2011 年。〕

DOSSE, François (1991-1992), *Histoire du structuralisme I, II*, Paris, La Découverte.〔フランソワ・ドッス、『構造主義の歴史』（上・下）、清水正・佐山一・仲澤紀雄訳、国文社、1999 年。〕

ENGLER, Rudolf (1974), « Sémiologies saussuriennes — 1. De l'existence du signe », *Cahiers Ferdinand de Saussure* 29, Genève, Droz, pp. 45-73.

— (1980), « Sémiologies saussuriennes — 2. Le canevas », *Cahiers Ferdinand de Saussure* 34, Genève, Droz, pp. 3-16.

GODEL, Robert (1957), *Les sources manuscrites du Cours de linguistique générale*, Genève, Droz.

GREGORIVS EPISCOPVS TVRONENSIS [Grégoire de Tours], *HISTORIA FRANCORVM*.〔トゥールのグレゴリウス、『フランク史――一〇巻の歴史』、杉本正俊訳、新評論、2007 年。〕

浜崎長寿・松村国隆・大澤慶子〔編〕(1981)、『ニーベルンゲンの歌　抜粋・訳注』、大学書林。

石川栄作 (1992)、『『ニーベルンゲンの歌』――構成と内容』、郁文堂。

— (2001)、『「ニーベルンゲンの歌」を読む』、講談社学術文庫。

— (2004)、『ジークフリート伝説――ワーグナー『指環』の源流』、講談社学術文庫。

—〔訳〕(2011)、『ニーベルンゲンの歌』（前編・後編）、ちくま文庫。

JABLONKA, Ivan (2012), *Histoire des grands-parents que je n'ai pas eus*, Paris, Seuil.〔イヴァン・ジャブロンカ、『私にはいなかった祖父母の歴史』、田所光男訳、名古屋大学出版会、2017 年。〕

— (2014), *L'histoire est une littérature contemporaine. Manifeste pour les sciences sociales*, Paris, Seuil.〔『歴史は現代文学である――社会科学のためのマニフェスト』、真野倫平訳、名古屋大学出版会、2018 年。〕

金澤忠信 (2017)、『ソシュールの政治的言説』、月曜社。

— (2017)、「凡庸さとありきたりなもの」、『ユリイカ』「総特集・蓮實重彦」10 月臨時増刊号、青土社、355-369 頁。

— (2018)、「ソシュールの伝説・神話研究」、『21 世紀のソシュール』、松澤和宏編、水声社、155-170 頁。

— (2019)、「ソシュールの伝説・神話研究における歴史の概念」、『香川大学経済論叢』第 92 巻第 3 号、2019 年 12 月、7-29 頁。

高津春繁〔訳〕(1953)、アポロドーロス、『ギリシア神話』、岩波文庫。

真野倫平 (2018)、「イヴァン・ジャブロンカと歴史記述の問題について」、『南山大学ヨーロッパ研究センター報』第 24 号、2018 年 3 月、51-62 頁。

MARCELLO-NIZIA, Christiane [éd.] (1995), *Tristan et Iseult, Les premières versions européennes*, Paris、 Gallimard (La Pléiade).

MONOD, Gabriel (1872-1885), *Études critiques sur les sources de l'histoire mérovingienne*, 2 vol., Paris, A. Franck.

— (1876), « Du progrès des études historiques en France depuis le XVIe siècle », *Revue historique*, tome I, janvier-juin.

小倉孝誠 (2020)、「現代フランスにおける文学と歴史学の位相」（配布資料）、ワークショップ「文学と歴史（学）の関係を問い直す」、日本フランス語フランス文学会 2020 年度秋季大会（オンライン）、2020 年 10 月 25 日。

佐藤輝夫〔訳〕(1953)、ベディエ編、『トリスタン・イズー物語』、岩波文庫。

— (1981)、『トリスタン伝説――流布本系の研究』、中央公論社。

SAUSSURE, Ferdinand de (1879 [1878]), *Mémoire sur le système primitif des voyelles dans les langues indo-européennes*, Leipzig, Teubner.

— (1916), *Cours de linguistique générale*, publié par Charles BALLY et Albert SECHEHAYE, avec la collaboration d'Albert RIEDLINGER, Paris, Payot.〔フェルディナン・ド・ソシュール、『一般言語学講義』（改版）、小林英夫訳、岩波書店、1972 年。『新訳ソシュール一般言語学講義』、町田健訳、研究社、2016 年。〕

— (1922), *Recueil des publications scientifiques de Ferdinand de Saussure*, publié par Charles BALLY et Léopold GAUTIER, Genève, Sonor; repr., Genève, Slatkine, 1970.

— (2003), « Légendes et récits d'Europe du Nord : de Sigfrid à Tristan », présentation et édition par Béatrice TÜRPIN, *Saussure*, Paris, L'Herne, 2003.〔フェルディナン・ド・ソシュール、

「北欧の伝説と説話――ジークフリートからトリスタンまで」、ベアトリス・テュルパン編、『伝説・神話研究』、金澤忠信訳、月曜社、2017 年。〕

STAROBINSKI, Jean (1971), *Les mots sous les mots — Les anagrammes de Ferdinand de Saussure*, Paris, Gallimard.〔ジャン・スタロバンスキー、『ソシュールのアナグラム』、金澤忠信訳、水声社、2006 年〕

菅原邦城〔訳・解説〕(1979)、『ゲルマン北欧の英雄伝説――ヴォルスンガ・サガ』、東海大学出版会。

THIERRY, Amédée (1856), *Histoire d'Attila et de ses successeurs, jusqu'à l'établissement des Hongrois en Europe*, tome I-II, Paris, Didier.

THIERRY, Augustin (1840), *Récits des Temps Mérovingiens*, Paris, Libraire Garnier Frères.〔オーギュスタン・ティエリ、『メロヴィング王朝史話』（上・下）、小島輝正訳、岩波文庫、1992 年。〕

TÜRPIN, Béatrice (2003), « Légendes — Mythes — Histoire. La circulation des signes », *Cahier Saussure,* Paris, L'Herne, pp. 307-316.